

# Coelogyne<sup>コエロギネ</sup> の 解剖学

マスクで覆った鼻腔にもツンとして伝うほど、都市で交配を重ね、作出された洋蘭の花は濃縮した蜜の匂いがしています。Coelogyne(セロジネ)という名の交配種のひとつでした。Coelogyneのもうひとつの学名読みはコエロギネ、ギリシャ語由来でコエロは「穴・窪み・空洞」、ギネは「雌・女性」という意味の2語が合わさった単語です。

ある日の午後、わたしはここからそう遠くない、都市にあるガラス張りの温室で人工的に作出された乳白色の洋蘭を前にコロナ禍で過ごした酪農場での日々のこと、そして、ここにもいた家畜動物である彼女たちのこと、あるいは人間によって生殖や遺伝子操作がなされているあらゆる動植物に関して思考を巡らしていました。

例えば、今年の二月に、この島国でヒトに臓器を提供するための豚が生まれたというニュースが報道されたことを覚えていますか。近年、海外でも遺伝子操作した豚の心臓を人間に移植したというニュースがありました。ヒトの細胞を動物の受精卵に注入して、雌の子宮に戻し、その仔を雌に産ませ、その仔の体内で人間用の臓器を育てるキメラ技術も進んでいます。近い将来、人間の臓器を供給するための家畜工場がつけられる予感がしています。

近代以後の人間の欲望は、ほかの動物に対する生命倫理の境界についてどのように扱ってきたのでしょうか。また、動物の胎と体を使って自らの臓器を作り出す行いは、自らの日々の糧を得るために動物を家畜化し、その営みと共に過ごし、その生命の在り方を管理することと、どのような違いがあるのでしょうか。

「コエロギネの解剖学」では、役目を終えた酪農場の畜舎を舞台に近代以後、家畜界の女性市民とされる牝牛たちの一生と、この島国における彼女たちの母乳利用に関する地政学的な歴史を女性の声による語りと環境音を用いて紐解いていきます。

人間にとって、彼女たちはミルク製造機であり、彼女たちの子宮・コエロは彼女たち自身をクローンのように生み殖すための資源として利用されています。しかし、彼女たちにもわれわれ人間と同じように精神活動や情動があり、その生命は彼女たち自身の生命の力によって生かされています。一万年先、野生動物だった彼女たちと、これからの百年、私たち人類はどのように接し共生していくことが可能なのでしょうか。この島国の酪農場とされているここ千葉県の畜舎から何かを新しく思考し始めることができるのかもしれません。

コロナ禍で過ごした酪農場での日々の中で、  
彼女の子宮に人工受精の挿管が差し入れられたのを視た時、  
私は自身の胎に痛みを感じた。この感覚はきっと雌の機構を持つものだけが感じる痛みだろう。  
そのことがいまでも忘れられない。

妊娠と出産を繰り返す、その母乳を他種である人間に提供し続ける彼女たちは、  
生物個体として「私」よりも遥かに成熟していると思われた。

彼女たち以上に、私たち人間は何かしらの資源を  
この惑星に、または他の動物や植物のために提供することができるだろうか。

(※「資源」という言葉は本来、人間の諸活動や産業の為に利用できる全ての原材料ことを意として使用されます。)

